



歴史系博物館における震災資料展示：兵庫県立歴史博物館特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」を企画して（〈特集Ⅱ〉同時代史としての震災展示：兵庫県立歴史博物館特別展を通して）

吉原，大志

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:88-97

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505414>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505414>



歴史系博物館における震災資料展示

―兵庫県立歴史博物館特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」を企画して―

吉原 大志

はじめに

阪神・淡路大震災から三〇年を迎えた二〇二五年、兵庫県立歴史博物館（以下、兵庫県博）において、特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる―情報と通信の一九九〇年代―」が開催された（会期…一月一日～三月一六日）。筆者は兵庫県博の学芸員としてこの特別展を企画し、展示を行った。本稿は、この特別展の開催にいたる経緯や展示の概要をまとめ、そこに込めた意図についてまとめる。その際、本展示をつくりあげるにあたって神戸大学の教員や学生とともに準備を進めたことから、特に博物館と大学との連携についても論じることとしたい。

一 展示のねらい

―現代史として阪神・淡路大震災を捉える―

ここではまず、本展示がどのような構成と内容を持つものであったか、その概要をまとめる。そのうえで、次章以降において、この展示が出来上がるまでの過程について記すこととしたい。

まず本展示のメインテーマ「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」には、ふたつの含意がある。ひとつめは、被災地における被害や復興の状況、そして被災した人びとが生きるために必要な情報について情報を発信し共有するという、震災が起きた同時代における「伝える・知らせる」。もうひとつは、震災をきっかけに体験したことを、自分だけのものととどめずに、次の時代へ向けて「伝える・知らせる」。このふたつである。



図1 展示会場入口のようす



図2 ミニコミ誌の展示

このテーマを考えるため、本展示の副題を「情報と通信の一九九〇年代」としたとおり、阪神・淡路大震災の被害と救援復興について、情報と通信を切り口に考えることのできる資料を展示した。しかし、兵庫県博では、阪神・淡路大震災に関する資料を数点のみしか所蔵していないため、展示資料の大部分を他の資料所蔵機関や、企業・団体、個人から借りて展示した。その内容は、以下のとおり全体で四章にわたる構成である^①。

（一）情報と通信の一九九〇年代

一九九〇年代は、日本社会において情報と通信のあり方が少しずつ変化しはじめる時期である。情報を伝える手段として、一九九五年ごろから携帯電話の利用が進み、情報を集めるという点においては、従来のテレビや新聞・雑誌だけでなく、新たにインターネットが普及しはじめる。こうした情報と通信のあり方が転換しつつあるなかで阪神・淡路大震災が起きたということになる。

そしてこの時期は、兵庫県の人口においても変化があらわれる。特に神戸市においては大規模な都市開発によって郊外地域の人口が増加する一方で、長田区のような旧来の市街地の人口は減少するなど、いわゆる「インナーシティ」問題が生じていた。また、一九八〇年代からは、それまでも多かった中国や朝鮮半島にルーツを持つ人びとにくわえ、フィリピンやベトナム、中南米など、多様なルーツを持つ人びとが兵庫県内に住むようになる。

こうした一九九〇年代の状況について、展示のなかでは主に統計データをパネルで表示し、当時使用されていた通信機器や地域ジャーナル、ミニコミ誌などを展示した。

（二）被災地を伝える

地震発生直後、電気や電話などの通信手段が寸断され、被災地に立地していた新聞やテレビ、ラジオなどの報道機関も被害を受けたため、震災による被害のようすはすぐには伝わらなかった。しかし、地元神戸の報道機関は自身が大きな被害を受けながらも、すぐさま震災についての報道を始め、被害の詳細や生活に必要な情報を伝えてきた。ここでは、そうした取り組みに関する当時の資料を紹介した。たとえば、地元の神戸新聞社が発行した臨時の地域版や、サンテレビジョンの番組編成表、ラジオ関西の社屋の被害写真のほか、報道機関が当時使用していた機材などである。こうした資料は、実際に報道機関の社屋に保存されているものを借用した。

また、地震発生から時間が経過するなかで、地元紙と全国紙とのあいだでは震災報道の続け方にちがいがあらわれる。その変遷を見比べるため、震災直後と三ヶ月後の新聞紙面を展示した。これについては、地震発生後からの新聞原紙を収集・保存

している「人と防災未来センター」（以下、人防）から資料を提供していただいた。

（三）必要な情報を伝える

震災後、全国各地から数多くのボランティアが駆けつけ、被災者への支援に取り組んだ。その人数は、一九九七年末の時点でのべ約一八〇万人にもものぼると言われる。震災直後から避難所運営や炊き出し、医療、物資などの局面で大きな役割を果たしたボランティアたちは、被災者への情報発信を特に重視していた。テレビやラジオからの情報に十分に頼れないなか、炊き出し、救援物資、病院の開院状況のほか、役所での支援窓口の紹介など、ボランティア団体それぞれの活動に即した情報を発信し続けた。

その際、日本語話者ではない被災者へ、どのように情報を届けるのが課題となる。多くの在日外国人が住む神戸市長田区では、多言語による情報発信が精力的に行われ、そうした活動が基盤となって震災後のまちづくりへつながった。

ここでは、ボランティア団体が発行した膨大な数のミニコミ誌を展示することで、震災後のボランティア活動と、それが向き合った被災地の課題を示し、震災後の地域づくりの活動への展開を振り返る構成とした。また、行政による復興政策に市民がどのように向き合ったのかについて、神戸空港設置問題や新

長田地域の再開発に関わる資料を展示した。

このコーナーでは、人防のほかに、神戸大学附属図書館震災文庫（以下、震災文庫）や、ミニコミ誌をはじめとする震災資料の収集・保存を続ける民間団体「震災・まちのアーカイブ」（以下、まちアカ）から資料を借用した。そして鷹取地域を拠点に多言語ラジオ放送に取り組んだ「FMわいわい」や、女性支援のための団体「ウィメンズネット・こうべ」など、実際に被災地で活動してきた市民団体からも多くの資料の提供を受けた。

（四）体験を伝える

震災を体験した人びとは、自身が体験し、見た光景をさまざまなかたちで記録しようとしてきた。これら膨大な記録は、詩や絵画、写真、語りなど、それぞれ方法と内容は異なるものの、この震災をきっかけとした体験を自分だけのものとするのではなく、他の人たちと共有し、次の時代へつなぐ大切な役割を持っている。ここでは、震災の体験が現在にいたるまでどのように伝えられているのかについて、いくつかの事例を紹介した。特に、後述するカメラマンの故・大木本美通氏が撮影した写真については、震災文庫からデータの提供を受けたほか、ご家族からは保管している撮影機材なども借用した。

以上、ここまで述べてきたような展示をつくるにあたって、

筆者が意識していたふたつのことがある。

ひとつめは、現代史として阪神・淡路大震災を捉えることである。今回の展示を企画するにあたってまず意識したのは、歴史系博物館として阪神・淡路大震災を展示するのであれば、震災が発生した一九九〇年代という時代の説明から始めるということであった。

阪神・淡路大震災について展示する代表的な施設である人防の展示は、よく知られているとおり、一九九五年一月一七日午前五時四六分に地震が発生するところから始まる。展示冒頭の映像シアターでは、地震発生時の様子を再現した特撮映像が大音量とともに上映され、それに続く展示コーナーでは、被害に関わる数値的な情報と、救援や復興に関わる資料がいくつかのキーワードとともに展示されている。そして最後には地震のメカニズムや、日常的な防災に関する体験コーナーがある。このように人防においては、阪神・淡路大震災の経験を踏まえた防災・減災の普及啓発という性格が前面に出たものと言うことができる^③。

これに対して、歴史系博物館においては、やはり震災が起きた時代に重点を置いた展示が必要だと考えた。地震のメカニズムや、被害や復興にかかわる統計情報ではなく、震災が起きた時代の社会状況や地域のようなすを考えるための資料を展示すること。それが今回の展示にあたってまず念頭に置いたことで

あった。

ふたつめに意識していたのは、震災資料収集・保存の積み重ねの成果を受けとめ、それをしっかりと活用につなげることである。震災当時の被災地において何が課題としてあり、被災者やボランティアがそれをどのように乗り越えようとしていたのか、三〇年前の被災地をめぐる社会のありようをテーマにした歴史展示を通じて、防災・減災意識の普及のためだけではない震災資料の活用可能性を考えることが、今回の展示における基本的な問題関心であった。その意味で、兵庫県内の歴史系博物館による阪神・淡路大震災の展示として、伊丹市立博物館（現・市立伊丹ミュージアム）が二〇一〇年に開催した展示「阪神・淡路大震災15年 伊丹からの発信」は具体的な先行事例のひとつであった。

そしてこうしたふたつの問題関心をもとにした展示を進めるとき、大きな原動力となったのが、大学との連携である。

二 博物館と大学による展示づくり

（一）着想のきっかけ

ここでは、この展示にいたる過程について、兵庫県博と神戸大学大学院人文科学研究科・文学部（以下、単に神戸大学と略記）との連携に特に焦点を当てて述べていきたい。

もともと、今回の展示企画について筆者の着想のきっかけとなったのは、神戸大学での震災資料のふたつの活用事例である。ひとつめは、吉川圭太氏（神戸大学文学部）の制作・編集による『阪神・淡路大震災を撮る 大木本美通追悼写真集』（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、二〇一九年）である。ここに掲載された写真の撮影者・大木本美通氏は、震災当時にテレビ局のカメラマンとして勤務し、被災地の記録写真を公私にわたって二〇年間撮影し続けた。その写真群は現在、震災文庫に寄贈され、デジタル画像がホームページ上で公開されている。

大木本氏による記録写真は、その分量はもちろん、撮影時期、場所などに関する情報が充実しており、阪神・淡路大震災の写真資料のなかでも基本となる資料群である。これにくわえ、大木本氏が震災前に撮影した神戸の写真もあわせてに掲載したこの写真集によって、同氏の残した膨大な写真記録の一部を一覧できるようになった。そしてこのなかには、大木本氏が使用していたカメラや撮影記録ノートも掲載されている。この写真集を通じて、「被災地の写真」とそれを撮影した機材、記録ノートという断片的ではあるが展示の具体的なイメージにつながった。ふたつめの活用事例は、神戸大学で二〇二〇年に開催された学生震災資料展『草の根市民メディアからの発信——ミニコミ』から問う阪神・淡路大震災』である（会期…一月一六日〜二月

四日。会場…神戸大学附属図書館社会科学系図書館）。この展示は、吉川圭太氏が文学部で開講していた現代日本史演習の一環として行われ、震災後にボランティア団体が発行したミニコミ誌を中心にした展示である。筆者自身はこの展示を直接に観ることはできなかったが、その展示資料目録に掲載されたミニコミ誌の数々を見て、その発行主体の多様さ、そして掲載されたテーマの幅広さを知ることができた。また、そのなかに含まれていた震災文庫や人防が所蔵する一部の資料については、筆者もこれまで閲覧したことがあったので、この学生震災資料展は、ひとつひとつ独特な誌面レイアウトやデザインをもつ多様なミニコミ誌を通じて、震災当時の社会を考える展示が可能であることを具体的に示してくれるものであったように思う。

以上ふたつの取り組みをうけ筆者は、まずこれらの写真資料やミニコミ誌を展示することのできるテーマを考え、「伝える・知らせる」「情報と通信」という切り口に思い至った。このテーマをもってすれば、民間のボランティア団体によるミニコミ誌だけでなく、新聞やテレビ、ラジオというマスコミによる報道について取り上げることができる。そして被災地における情報発信ということで言えば、神戸市長田区を中心に取り組まれた多言語による情報発信と、その後のまちづくりの実践も欠かすことができない。

また、大木本氏の写真は、被災地のようすを記録し、次の時

代へ伝える取り組みのひとつと位置付けることができるし、それ以外の人たちによっても、絵画や語り部など、さまざまな取り組みが現在にまで続いている。

このように、「伝える・知らせる」「情報と通信」というテーマを通じて、震災による被害と、そこからの復興、その体験を社会的に広く共有するという当時の時代を描くことのできるのではないかと考え、今回の展覧会のテーマを設定するにいった。

(二) 博学連携による企画

上述のとおりテーマを定めたとは言え、筆者はそれにそった資料の所在を必ずしも具体的にイメージできていたわけではなかった。人防や震災文庫など、主要な震災資料所蔵機関のほか、神戸新聞社など被災地のマスコミ、そして現在も活動が続く団体（F M わいわい）を訪ね、震災当時に作成された資料の調査を続けたものの、それだけでは展示テーマにそった資料をすべてカバーできるわけではなかった。

そこで筆者は、前述したような震災資料の活用実践をもつ吉川圭太氏に協力を依頼した。吉川氏には、神戸大学で受け持つ二〇二四年度前期の史料演習について、兵庫県博での震災展示の作成を目標のひとつに据えた内容として開講していただき、学部・大学院をあわせて日本史や社会学を専攻する一〇名の学

生が参加した。これにくわえ、同大学地域連携センターの佐々木和子氏、跡部史浩氏にもアドバイザーとして演習に参加していただいた。

この演習では、最初に筆者が展示の全体構成を説明したあと、学生たちは三つの班に分かれ、それぞれの班ごとにテーマを決め、展示候補となる資料の調査を進めた。学生たちが選んだテーマは、①震災後のボランティア団体の活動、②復興過程における諸問題、③震災体験の継承、この三つであった。学生たちは、震災文庫や「まちアカ」が所蔵する資料を主に調べ、展示する資料を選び、それに付ける解説文を作成した。演習においては、学生たちが調査結果と解説文案を発表し、それを展示全体のなかにどのように位置付けるかを意識しながら議論を続けた。

その過程では、筆者と神戸大学メンバーとが共同で資料調査を行い、展示につながった資料がいくつもある。たとえば「まちアカ」が所蔵する資料は、主要メンバーのひとりである佐々木和子氏の紹介を通じて調査する機会を得て、ボランティア団体のミニコミ誌などを多く借りることにつながった。また、吉川氏からの提案をうけて「ウイメンズネット・こうべ」からミニコミ誌の提供を受けた。これらはあくまでも一部だが、筆者だけでは必ずしもアクセスできなかったわけではない資料群であり、神戸大学メンバーとともに準備を進めたことで、展示資料の幅が大きく広がった。

こうした準備過程で、神戸大学の史料演習の場はとても大きな意味をもった。もともと人文系の学生は、さまざまな資料の内容を読み解き、その意味を考えることについて、普段の演習を通じてトレーニングを受けていると思う。これに対して、博物館で展示する資料を選び、その解説文を書くという作業は、必ずしも文字数が多いわけではなく、コンパクトな説明が求められるという点で、いわゆる論文を書くこととは異なる視点が必要になる。演習においては、資料の読み解き方や内容はもちろん、文字数、文体、語彙の選び方も含めて意見交換の対象となった。演習の終盤には、それぞれの解説文案を検討するため、集中作業に参加メンバー全体で取り組んだ。学生にとっては普段と異なる難しい作業だったと思うが、学生、教員、アドバイザー、そして筆者を含め、演習参加者全体で粘り強く意見を交わした。このように神戸大学での演習は、展示構成の全体像をつくり、参加メンバー間で共有することに通じる場であった。そこで議論のすべてをここに記すことはできないが、学生が選定した資料を、展示全体に位置付けるために行われた議論のひとつの例を紹介したい。復興過程の諸問題をテーマに取り上げた班は、震災後の神戸空港建設問題を取り上げた。展示候補の資料として探し出してきたのは、空港建設を推進する神戸市などが発行した広報誌やパンフレット、そして空港建設に反対する市民団体のパンフレットや学習会のチラシであった。

もともと震災前から神戸空港の建設計画はあったが、震災後すぐに当時の神戸市長が空港建設を推進することを表明したことから、市民からは大きな反発が生まれ、建設反対のための運動へとつながった。その意味で神戸空港の建設が、阪神・淡路大震災後の復興政策をめぐる諸問題のうちのひとつとして重要であることは間違いない。しかし、今回の展示テーマと、空港建設問題はどのように結びつくのか。演習においては、そこに特に議論の焦点となった。

このテーマが選び取られたことの意図が当初は見えにくかったが、繰り返し意見を交わすことを通じて、この班のメンバーが神戸空港についての資料を取り上げたのは、復興政策に関する情報が、行政と市民のあいだで、どのように発信され受け止められたのか知ることのできる資料だからということがわかってきた。たしかにその視点でいくつかの資料を見ると、単に空港建設の推進／反対というだけでなく、推進する側の説明の示し方がどのようなものか、また、反対する市民による運動が、復興のために空港が本当に必要かどうかを検証する取り組みであるといったことが理解できた。

こうした理解の深まりのなかから、復興政策をめぐる行政からの情報発信だけでなく、それに向き合う市民による検証の積み重ねという意味で、空港問題に関する資料を展示全体のなかに位置付けることが可能となった。

これはあくまでも今回の展示における一事例である。学生メンバーが選定した資料のひとつとは、企画者である筆者が当初想定していたものとは異なるものばかりであったが、それらによって展示の幅が広がり、今回の展示にとって大事な部分を構成するものとなった。資料の内容とそれが作成された文脈を調べて理解し、展示のなかでの位置を見定める作業を繰り返すことで、全体として深まりをもったように思う。展示を企画した側の視点からすると、このことが今回の展示を博物館と大学とともに準備を進めたことの大きな成果だと考えている。

まとめにかえて

以上、兵庫歴博での展示について、大学と博物館との連携の側面から述べてきた。展示の広がりや深まりの両面において、博物館と大学との連携によつてはじめて実現できた展示であった。最後に、震災資料を歴史系博物館で活用することの意味について、筆者が考えたことをまとめておきたい。

展示期間中に一度、筆者と学生による展示解説の機会を設けた。学生には、自身が選んだ展示資料の解説をしていただいた。解説に参加した来場者の多くは、おそらく震災をリアルタイムで経験した世代であったと思う。これに対して、解説を担当した学生はみんな、震災を直接には経験していない世代であるが、

それを経験した世代である人たちにむけて、堂々と語っているように見えた。そして参加者も、その言葉を深くうなずきながら聞いていた人が多かったように思う。

震災を直接に経験していない世代の言葉を、経験した世代の人が否定せずに受け止めて聞いていた（少なくとも筆者にはそのように見えた）のは、おそらく学生たちの語る言葉が、彼女らが徹底的に調べあげた資料に裏付けされたものだったからだと筆者は考えている。そしてその裏付けを確かなものにしたのは、人文系の学生たちが日ごろ積み重ねているトレーニングの成果だろう。

震災展示の難しさのひとつに、被災地における被害のあり方や復興過程の多様さ、複雑さをどのように提示するかという点がある。この多様さ、複雑さに向き合わなければ、震災をきっかけにしたさまざまな出来事は、成功した「復興」像や徳目としての「いのちの大事さ」へと収斂してしまうだろう。⁽³⁾ 今回の展示で歴史学や社会学の学生たちとともに取り組んだ作業は、震災資料を通して、被害や復興の多様さ、複雑さに少しでも迫ろうとしたことだったのだと思う。そしてそれは、現在に残された資料を歴史的な文脈のなかから読み解くという、歴史系においては人文系の学問の基礎的な作業でもある。だからこそ、その基礎的な作業を踏まえた学生たちの展示解説に、参加者はしっかりと耳を傾けてくれたのだと捉えたい。

このことと関連して付け加えると、今回の展示が、震災資料を通じて震災当時の社会の複雑さを考えようとするものであったのならば、そのことは必ずしも震災資料の問題だけにはとどまらないだろう。阪神・淡路大震災を現代史のなかで捉えるのであれば、震災展示はまさに現代史をどのように展示できるかという課題につながるものであると考える⁽⁴⁾。

今回の展示だけではこうした課題に十分にこたえるものではなかったかもしれないが、これをきっかけに多くの人たちと交わした議論を、これからの震災展示を深めることに活かしていきたい。そして最後に、この展示の作成に関わっていただいたすべての人たちに謝意を表したい。

註

(1) 展示の詳細については、兵庫県立歴史博物館編『図録 阪神・淡路大震災を伝える・知らせる—情報と通信の1990年代—』（兵庫県立歴史博物館、二〇二五年）を参照。

(2) 人防の展示については多くの論考があるが、特に吉川圭太「震災資料と震災展示」『歴史評論』八六五号、二〇二二年）を参照。

(3) 前掲吉川「震災資料と震災展示」。奥村弘「大規模自然災害時の歴史研究者と大学の役割」（歴史学研究会編『歴史を未来につなぐ』東京大学出版会、二〇一九年）。

(4) この点と関わって、近現代史展示の課題について述べた安田常雄「近現代展示論」（『岩波講座日本歴史 第二一卷 史料論』岩波書店、二〇一五年）を参照。